

佳作

星空を見上げて

比嘉 恵子

祖母が、生前まだ元気だった頃、私達三人の孫を前にして、星の話をしたことがあった。

「いったあや、星がみえにくくなとうしや、ぬうんちやがわかいみ。あぬ戦ぬ時、艦砲がたくさん落ちてきてねえ。うまにかあやむるまが穴ぬあちねえらん。（この辺りはみんな大きな穴だらけになってしまった）あんさあにる星が遠くなてい、見にくくなとうんどう。」

あまりにも外的外れな話に思わず吹き出しそうになったが、真剣な顔で話す祖母を見ていると私達は何も言えなくなった。祖母にとっては、星が遠くなったと思える程、あの艦砲の爪跡は大きかったのだろう。それにしても、最近、星が随分と見えにくくなった。

私は小学生の頃、星を見るのが大好きだった。

「UFOって、信じる？」

「もちろん、信じるよ。」

「えー、じゃあ宇宙人がいると思うわけ？」

「当たり前さあ。宇宙人は絶対にいるよ。」

私の返事を聞いた友人は、呆れたような目で私を見ていた。

五年生の頃だっただろうか。暑くて寝苦しい夜、私は屋根に上って夜空を眺めていた。大きなガジュマルの木が屋根の方まで枝を伸ばしてい

て、小学生の私でも簡単に上ることができた。

屋根の上で寝そべって見上げた星空は、神秘的な光景だった。北の空には北斗七星、南の空にはさそり座、真上には天の川。知っている星座は多くはなかったが、空には明るく光る星、暗くて今にも消えそうな星、赤い星、青白い星、黄色に輝く星が無数に散りばめられていた。流れ星もいくつも見えた。

その星たちを眺めながら考えた。向こうに見える遠い星の先には、何があるのだろうか？真つ暗闇の世界？それともまた星空が続いているのかな？じゃあその先は？いくら想像しても終わりが来ない。でも、何だか心がわくわくしているんな空想に耽っていた。星空をじっと眺めていると、ふとあの中の星のどこかに、今私と同じようにこの星空を眺めながら私のいるこの地球をじっと見ている人（？）がいるような気がした。

中学生になると、背が伸びたおかげでガジュマルの木を使わなくても屋敷を囲っているブロック塀からジャンプして屋根に上れるようになった。何度も星空を眺めているうちに思った。こんなとてつもなく広い宇宙の中で目に見えないような小さな地球という星に存在している私達人間。だとしたら、この広い宇宙の星々の中には、私達人類以上に優れた文明を持った生物がきっと存在するはずだと。星空を見る度にその思いは強くなった。

星空を眺めていると宇宙の壮大きさに圧倒される。この広い宇宙の中で私が今立っているこの地球の何と小さいこと。その地球上で点にも満たない自分は、何と小さな存在なのだろう。星空を眺めているとそんな気持ちになってくる。親友とけんかをしてむしゃくしゃした時、失恋をして泣きたくなった時、受験勉強が思うように進まなくて落ち込んだ日の

夜、屋根の上で星を見上げていると、悔しい気持ちも悲しい気持ちも、悶々と過ごした一日も、本当にちっぽけな出来事のような気がしてきた。そして、いつの間にか悩みが消えて、また頑張ろうという気持ちが湧いてきた。

そんな星空を見なくなったのは何時からだったろうか。気が付いたら、星空を見上げることが忘れてしまっている自分がいた。

家の周りにはいつの間にか家が建ち並び、夜遅くまで明かりが灯るようになった。家の前の砂利道はアスファルトの道に変わり、街灯があちらにもこちらにも立つようになった。夜空を見上げても、もう星はほんやりとしか見えなくなっていた。

私の生活も、呑気な学生生活から、仕事で忙しい毎日が変わっていた。仕事が終わわり、夜帰宅してからも、テレビの前か、部屋の中で仕事の残

務に追われているかの毎日。前や後ろを向くことはあっても、空を見上げることはしなくなっていた。

星空を眺めては空想を膨らませ、宇宙人の存在を確信し、自分の存在の小ささを知り、生きる元気を貰っていたあの頃の想いは何処へ消えてしまったのだろうか。今も空を見上げれば、あの頃と同じ星空が確かに在るはずなのに。

あの頃のようなきらきら輝く星空を見ることは難しくなっているけれど、見ようと思えば本当はいつでも見えるはずだ。私が見ようとしてないだけなのかもしれない。

もう一度、あの頃の気持ちで星空を見上げてみよう。きっと見えるはずだ。